

トカゲのしっぽ 蟻の影



池田香代子

4

市民放射能測定室

市民放射能測定所に出席したのは20年以上前、チェルノブイリ原発事故のあとだった。人ひとがお金を出し合って測定機械を買い、土や食べ物にふくまれる放射性物質を計る。日本にもできたが、当時の旧西ドイツにはおびただしい測定所が開かれた。不運なことに、南ドイツは流れてきた放射能雲が雨となって降り注ぎ、あちこちにホットスポットができたのだ。人ひとの目に、政府の対応は後手に回っているように、また真剣味を欠いているように見えた。ならば自分たちの健康は自分たちで守ろうと考えた人ひとにより、市民放射能測定所はつくられた。

中央線八王子駅から甲州街道を西に15分ほど歩くと、ちいさな診療所の2階に「八王子市民放射能測定室 ハカルワカル広場」はある。壁一面の窓から外光が入る、60平方メートルはあろうかという広々とした部屋に、5、6人の人ひとが談笑していた。キッチンでは、ジャガイモがみじん切りにされていた。みじんにした検体1ポコを、ビニール袋を敷いたプラスチック容器にぎゅう詰めにし、機械にセットする。あとは、ノートパソコンにグラフが現れるのを待つ。そのあいだにお話を伺った。ここが開かれたのは今年の1月末、子どもが内部被曝を心配する人ひとが、怖がっていてもしょうがない、計ることに話

「考える拠点」市民の底力

西田さんがおかしそうに言う。その方、「宮澤郎さんはチェルノブイリ事故以来、ずっと個人で放射線を計ってきた。その知見と経験が生かされているのだという。」

「だけとお金もいりますよね」「ペラルーシ製の測定器が143万円です。賛同者が20人近く集まったときに見切り発車しました」

「ここだって、すばらしい場所じゃありませんか」

「放射線を計るのが趣味の人がいたんです」

「放射線を計るのが趣味の人

「下の診療所の院長さんに、『家賃はあまり出せない』と言ったら、『出せるだけでいいですよ』って」

「太っ腹の大家さんですね」

「だって山田真先生ですもの」

院長が、障がい児教育に熱心な、今は福島支援に忙しかつておられる山田医師だったとは、なんといい幸運だろう。

「リフォームはみんな手作りです。パソコンや冷蔵庫や家具なんかも安い物が多いんです」

「このうちがホームページに解説付きで公開される。プリントアウトしたグラフを見ながら、みんなで話し合う。」

「ここには山が出てたらセシウムです。だけども一つだけってのは、外から拾っちゃったんじゃないかね。薄い線はバックグラウンド」

「このギザギザがはつきりしてないでしょ」

私にはさっぱりわからないが、依頼人も含め、みなさんなれたものだ。

「月一回勉強会をやるんです。そして何日かボランティアすれば、誰だってわかるようになります」と西田さんは言っていて、電話をかけた。例の「放射線を計るのが趣味」とまで言われた「宮さんが、自宅のパソコンで測定結果を見ているのだ。それで確認できた結果は、ジャガイモもナスも不検出だった。」

「2月から600検体くらい計ってますが、食べ物で出たのはキノコやお茶葉などに限られています。お米の依頼が多いですね。福島の実家から送られてきた、なんともありません。ええ、不検出でしたよ」

その依頼人はこれほどうれしかっただろう。親の労働と愛情を、文字通り捨てなくてすんだのだ。ふるさと人が生き、土を耕すに値するところだと、確信できたのだ。

「ドイツの測定所は、みんなで原簿を考える拠点になったんですよ。ここもそうなるという思っています」

西田さんの言葉に市民の底力を感じた。



「ゲンパツイライナイ牛」スズキコージ

けれど、寄せ集めのわびしさはない。部屋はあたたかい手作り感に満ちていた。

「世の中って、お金だけで回ってるんじゃないんですね」

「壁にすてきな書が飾ってあった。」

「メンバーのお母さまが書いてくださったんです。宮沢賢治の『ポラーノの広場』です」

そこに集まれば元気になるといふ広場を歌った詩は、たしかにここにふさわしい。

そろそろパソコンのグラフが安定してきた。今日の依頼人は、東村山の主婦の方。計ったのは、家庭菜園で作ったジャガイモとナスだ。よく利用する会員だといふ。年に6000円払って会員になると、「検体5000円という格安の料金で計ることができ。検出結果はすべて、その

（翻訳家）